

# 保育実習における「学び」と「気づき」による保育士像の形成

— 保育科学生の学び・気づきの原点、将来象、目指す保育士像 —

## The Formation of the Image of a Child Care Person in “Learning” and “Awareness” through the Child Care Practices

— The Starting Point of their Realization and their Image of a Future Child Care Person —

次世代教育学部 乳幼児教育学科

太田 賀月恵

OHTA, Katsue

Department of Early Childhood Education  
Faculty of Education for Future Generations

**キーワード**：保育実習，学び・気づき，保育士像

**Abstract** : The purpose of this research was to clarify students' perceptions and knowledge after the child care practices at a nursery school and a kindergarten. It also examined how their ideal images of a child care person were formed. The survey was conducted on 182 students at K Junior College.

According to the results, the students learned the importance of a way of looking after children individually, of bringing out their basic talents, and of communicating effectively with them. Their ideal images, then, were the ones whose attitude is being considerate, cheerful, and active in dealing with children. This paper concludes that their realization as child care persons was brought forth through pragmatic care experiences.

**Keywords** : child care practice, learning & awareness, child care person

### I. 研究目的

近年、こどもをとりまく環境は大きく変化してきた。都市化の波はこどもたちのあそび場をうばい、自然の中でのあそび、泥んこあそび、直接的具体的な体験を通してあそぶ機会を奪ってしまった。また、こどもたちは室内あそびなどによってこども集団がなくなり、人間関係が稀薄化し、コミュニケーション能力を形成する機会が減少した。さらにまた運動あそびの機会が減少し、体力低下、肥満、生活習慣病を招き、夜型の生活により生活リズムを狂わせ、心身ともに耐性を欠くような状態にある。そのため、キレるこどもや多動的なこどもを発生させ、そのしわよせが教育現場に及ぼす影響が甚大である。

女性就労者の増加や価値観の多様化など社会様相の変化とともに、少子化が一段と進む中、次世代を担うこどもが未来を拓くため、特に乳幼児期における教育保育が重要な今日的課題となっている。そこで多面的

な能力と資質向上を目指した保育者の養成が重要な課題となる。

全国保育士養成協議会等での研究報告からも多くの問題点が指摘されている。それは学校（養成校）でのシークエンス=sequence（教科目の配列）の問題、保育実習時期、保育上の専門性とふりかえり教育、また地域社会との連携・支援、保護者との連携・支援、保育サービス、現場保育者のリカレント教育・キャリアアップ教育等々、多義にわたり様々な要求が保育者に求められている現状である。その基礎教育の体験の場である保育実習では、学校で学んだ理論・実習・実技などが現場でどのように活用実践されているのか「体験・観察」し、理論と実践との関係を学び取り、また、こどもとの関わりを通して、専門職の目的目標・価値観・教育観などを学びとるものである。

今回は保育実習に的を当て、2年間の保育科での学修がいかに保育実習に生かされたか、実習で学生たちは何を「学び」、どのような「気づき」があったのか、

またその結果、目指す保育士像形成への影響、保育士としての将来の自分の生き方・使命感を見出し、保育士としてのアイデンティティ形成が得られたかを確認するものである。また保育実習の事前・事後の指導にも役立たせるための基礎資料を得ることを目的とした。

(※本論文では、保育実習とは保育園と幼稚園における実習を指す。)

## II. 研究方法

著者作成の質問紙「保育学科学生の学修に関する調査」(自由記述式16問)の中から、保育園実習と幼稚園実習における5項目の質問、1.「保育実習(保育園・幼稚園各々)から学んだことは何でしたか」、2.「保育実習に役立った科目は何ですか」、3.「将来どのような保育士になりたいと思いますか」、4.「生涯、保育士を続けたいですか」、5.「将来あなたの子どもを幼稚園と保育園どちらに行かせたいと思いますか、またそれは何故ですか」、についての回答を集計し、それを基に表題(テーマ)について考察を展開した。

質問紙法による調査を実施したのは、平成19年2月5日～7日の期間で、対象はK女子短期大学2年生182人であった。

## III. 結果と考察

質問項目1.「保育実習(幼稚園・保育園各々)から学んだことは何でしたか」に対する様々な自由記述内容から12項目にまとめ表1に示し、それを図1に表した。また各項目の内容を表2と表3に示した。

表1 保育実習から学んだこと

| 内 容           | 保育園    | 幼稚園    |
|---------------|--------|--------|
| 1. こどもへの関わり方  | 38.6 % | 29.0 % |
| 2. 保育方法       | 16.2   | 28.0   |
| 3. 年齢による発達の違い | 11.9   | 3.9    |
| 4. 援助・お世話     | 11.3   | 0      |
| 5. 言葉・声かけ     | 8.1    | 12.1   |
| 6. 保育者自身の気づき  | 4.8    | 8.1    |
| 7. 生活習慣の大切さ   | 2.9    | 2.9    |
| 8. 安全面の注意     | 2.9    | 0      |
| 9. 衛生面の大切さ    | 1.9    | 0      |
| 10. 保護者との関わり  | 1.4    | 2.4    |
| 11. 教育的なことを学ぶ | 0      | 3.9    |
| 12. 先生の仕事     | 0      | 9.7    |

(1)「こどもへの関わり方(接し方・対応)」については、保育園38.6%、幼稚園29.0%と、両者とも一位であり高い比率を示した。その内容を表2(保育園実習の場合)と表3(幼稚園実習の場合)から対比してみると両者とも、①一人ひとりのこどもを尊重し、こどもの目線に立ち、見守ること、平等に扱うこと、②こどもと一緒に共感し楽しみ、コミュニケーションをはかり信頼関係を築くこと、③お母さん代わりとして接し、こどもへの気配りと配慮、また、しつけ(叱りかた、ほめ方)が大切であること、④落ち着いたないこどもへの対応、けんかの扱い方、障害児に対する対応の仕方などは同じであったが、一方、保育園では異年齢への関わり、長時間児の受け止め方・接し方に関する記述があった。これは保育園では年齢幅が広いこと、長時間、特に一日の大半を園生活にあて過ごしていることにより、親代わりとしてケアをどのようにしたらよいか、保育者としての構え、責任感・使命観を持つことが大切であることが学び取れた、としている。

これらの結果により、「保育者がいかにこどもの心に深く入り、個々の特徴をつかみ、素養を引き出し、対処・指導・援助ができるか」に気づきがあったと思われる。幼稚園・保育園ともにこどもへの関わり方(接し方・対応)の「学び・気づき」が、いかに教育・保育の上で重要であるかがわかる。これらの「学び・気づき」は、現場での体験を通してのみ養われるもので、模範的な授業と理論的授業だけでは保育者としての資質向上には繋がらないであろう。実習においてこそ学び得るものであり、この質問項目では、保育者として最も大切な資質であることが実証できた。

(2)「保育方法」の内容については、保育園(16.2%)、幼稚園(28.0%)と両方とも第二位であった。保育園が幼稚園より少ない割合であった。しかし、その内容を表2・表3からみると、保育園・幼稚園両者とも、①保育形態として自由保育、設定保育、縦割り保育を行っている、②保育方法としてモンテッソーリ教育を取り入れている、年齢に合った、またこども一人ひとりに合った教育・保育、ユニークに工夫された教育・保育、目標を持たせながらこどもをほめることにより、やる気・意欲などの伸ばし方を考慮している、③指導案(日案・部分案)の書き方、一日の流れ、日誌の書き方の大切さがわかった、となっている。両者の相違は、保育園では掃除、食育の大切さ、給食教育の大切さ、わらべ歌、リズムあそび・手遊び・鉄棒あそびなどの「あそび」の大切さに重点が置かれていること、

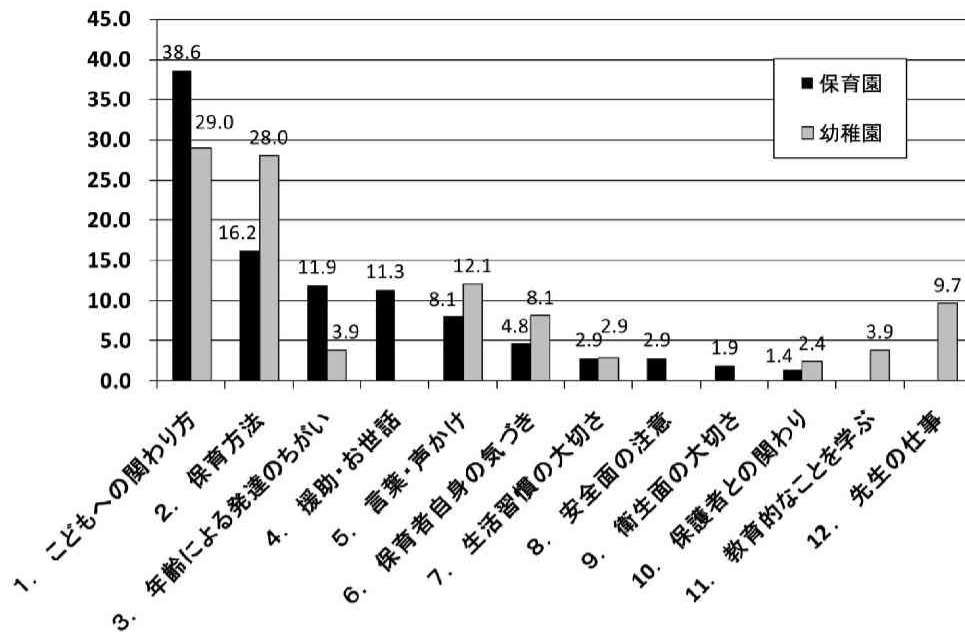


図1 保育実習から学んだこと

こどもへの接し方・対応・対処の仕方を基にいかにかこどもの生活を支え、ケアしていくか、こころを育み、様々な方法で保育を遂行していくかに重点がおかれているところであり、一方、幼稚園では年齢が高ことから指導援助をおこなう技術としての丁寧な言葉づかい、きれいな言葉で話すこと、わかりやすく話すことの重要性、ピアノ・体育・絵本読み・国語力のつけ方、接し方と指導・援助法など教育技術的な面に重点がおかれているところであった。

以上、保育方法においては、保育園・幼稚園ともに同じ傾向にあるが、保育園の場合は長時間の子供との関わりのため、あそびを通して園生活を援助・指導しながら教材作りに頑張っているところに気づきがあったことが伺えた。幼稚園の場合は保育園より余裕ある時間で教材作りができるため、より教育的観点からのアプローチができることの違いを感じた実習生が多い

と考察できた。

(3)「年齢による発達の違い」の内容については、保育園(11.9%)、幼稚園(3.9%)と差が大きかった。順位では、保育園は三位であるが、幼稚園では六位と、両者に隔たりが見られた。これは、保育園は0～5歳児を対象に幅広い年齢に対して、幼稚園は3～5歳児と年齢幅の小さいこどもを対象に教育・保育していることの違いで、保育園での0歳児(乳児)の目ざましい発達を遂げる時期であること、また1～2歳児における言葉の発達、こころの発達に顕著な発達がみられるところ、また成長発達の大きいところ、などの気づきが上位にランクされた理由である。幼稚園では思ったより大人であること、自分をしっかり持って自立していること、頑張る姿、観察力の素晴らしさ、優しさ・思いやりのこころが育まれていること、に気づきと驚きを感じ、実習での「学びと気づき」の結晶であると

表2 保育園実習の場合

|   |   |
|---|---|
| 1. こどもへのかかわり方   | 3. 年齢による発達の違い   |
| ①こどもへの関わり<br>異年齢への関わり、個の尊重、こどもへの配慮、コミュニケーションの大切さ<br>こどもの立場に立つ、様々な気づきと気配り、こどもをしっかり理解する<br>共感して楽しむ  | からだの発達、こころの発達、成長発達の個人差  |
| ②こどもへの接し方・対応の仕方<br>見守る大切さ、お母さんのように接する、障害児への対応、長時間の受け止め方   | 4. 援助・お世話<br>食事の世話、授乳法、オムツ換え、トイレ・トレーニング、0才児のお世話<br>絵本読み、はなしかけ                               |
| 2. 保育方法<br>縦割り保育、自由保育、設定保育、年齢にあった保育、一人一人に合った指導<br>モンテッソーリ教育、ほめる大切さ、掃除の大切さ、食育の大切さ<br>給食教育の大切さ、行事に関する指導、上手な保育法、一日の流れ<br>日案のつけ方、日誌のつけかた、あそび(リズムあそび・わらべあそび・手あそび歌・音楽・おもちゃあそび)の大切さ、教材の作り方 | 5. 言葉・声かけ<br>0才児への言葉かけ、各場面での声かけ・言葉かけ  |
|   | 6. 保育者自身の気づき<br>積極性、向上心と学びの心、勉強の必要性、やりがい、視野が広がった根気強くなった、人間関係の大切さ、仕事の厳しさ、保育士としての心構え<br>先生の役割 |
|   | 7. その他<br>生活習慣(生活リズム)の確立の大切さ・安全面(目を離さない)の注意<br>衛生面の大切さ・保護者との関わり                             |

も言える。年齢による発達の変化の気づきこそ、保育者としての学びの一步である。

(4)「援助・お世話」についての内容は、保育園での乳児・未満児に関してのものが多く、11.3%と四位であった。また、幼稚園ではしつけについての回答だったので教育の一貫として保育方法に加えたため0%であった。保育園における0歳児の授乳・排泄・食事のお世話、自立の一步であるトイレ・トレーニングなどは、援助が必要な時期であり、実習生にとってかなり大きな学びと気づきであったと推察できる。

(5)「言葉かけ・声かけ」については、保育園で8.1%、幼稚園で12.1%、であった。幼稚園では保育方法に次いで三位にランクされた。保育園でもこどもの援助・お世話に続いて上位にランクされた。これは、保育園・幼稚園とも指導・援助法としての言葉かけ・声かけがこどもとのコミュニケーションを形成し、言葉による働きかけがこどもの意欲を引き出し、積極性・自立心の形成につながり、声かけ・言葉かけが、積極的なところを育む要素としていかに大切であるかが伺えた。

(6)「保育者自身に対する気づき」については、保育園で4.8%、幼稚園で8.1%とほぼ同じ順位(保育園六位・幼稚園五位)にランクされた。その内容は、保育園・幼稚園ともに、①仕事の厳しさ、真剣さを知った、②保育士としての構え、関わり、役割の大切さ、③保育者として多くのことを勉強しなければならないこと、④こどもを愛する大切さを知り、気持の余裕を持つこと、また保育者自身も楽しむこと、⑤根気強くなった、視野が広がった、積極性が大切、やりがいのある仕事と感じた、などにまとめられた。園での様々な仕事をこなし、こども達に接し、指導・援助を経験することによって教育・保育全般を知り、自分自身に

どの様な構えが必要なのか、常に勉強しなければならない、責任のある、また、やりがいのある職業と感じとり、保育者としての自覚がはっきり浮き彫りになった、と推察できる。

(7)「生活習慣の大切さ」については、保育園で2.9%、幼稚園で2.9%と同率で、順位もほぼ同じであった。その内容をみると、保育園では、①生活リズムの確立の大切さ、②幼稚園では生活習慣とともに、身だしなみ、あそびの力をつける、という記述であった。保育園では未満児のこどもまで対象にお世話しているため、3歳までの生活リズムの確立が基本的な生活習慣の基礎要素になるかを示唆していると推察できる。幼稚園では保育園より年齢が高いため、基本的な生活習慣に加えて、みだしなみ、あいさつ、あそびの習慣、あそびの力をつけることなどまで、保育実習で学びとることができていると思われる。これらは、学生たちが目指す保育士としてのすばらしい体験であった。

(8)「安全面の大切さ」と(9)「衛生面の大切さ」については、保育園実習での回答のみであり、両者2~3%の割合であった。幼稚園においても安全面、衛生面の大切さを感じ取っていると推察できるが、特に乳児を扱う保育園においては、授乳時での容器の消毒、お世話する保育士の手洗いなど、衛生面での神経を使う場面に直面し、強く印象に残った結果ではないかと思われる。また、“うつ伏せ状態”、“ベッドからの転落”、“何でも口に入れる”、“頭をぶつける”、“転びやすい”等々で目が離せないことの経験によって安全面での保育の大変さ、重要さを感じ取ったと思われる。

一方、幼稚園の場合は「安全面での気づき」は低年齢を扱っていないことにより常識範囲内のことと受け止めたこと、また、こどもの好奇心、冒険心など意外性・危険を越えての行動による行為に遭遇しなかった

表3 幼稚園実習の場合

|   |  |
|---|--|
| <p>1. こどもへのかかわり方<br/>①こどもへの関わり<br/>こどもと共に楽しむ、個々を尊重する、コミュニケーションの大切さ<br/>信頼関係を築くこと、お母さんのようになること<br/>②こどもへの接し方・対応の仕方<br/>平等に扱う、こころ配り、気配り、こどもを見守る保育、こどもの様子を受け止め待つ姿勢、落ち着きのないこどもへの接し方、けんかの扱い<br/>叱り方・ほめ方、障害児の接し方</p> <p>2. 保育方法<br/>設定保育、縦割り保育、モンテッソーリ教育、こどもにあった保育<br/>年齢別保育の方法、意欲の育て方、良い点の伸ばし方、自信のつけ方<br/>全体把握の大切さ、指導援助・工夫することの大切さ、ユニークな指導援助法<br/>きれいな言葉での話し方、日誌のつけ方、指導案・部分案の立て方<br/>ピアノ・体育・絵本読み・国語力などのつけ方・教え方</p> | <p>3. 年齢による発達の違い<br/>自分をしっかり持っている自立している、頑張る姿・観察力の素晴らしさの発見<br/>優しさ・思いやりのこころの発見、各年齢別クラスの特徴</p> <p>4. なし</p> <p>5. 言葉・声かけ<br/>問いかけ、その場に応じた言葉かけ・声かけ、意欲を引き出す言葉かけ</p> <p>6. 保育者(実習生)自身の気づき<br/>保育者自身が楽しむ、積極性が必要、広い視野を持つこと<br/>余裕を持つことの大切さ、物を大切にできる気持、愛する大切さ、時間を守ること<br/>延長保育の大切さ、保育全般を知った</p> <p>7. その他<br/>生活習慣の大切さ、保護者との関わり、教育的なことを学ぶ(教育のありかた、環境の作り方、人格を作る基盤、教育理念など)、一人担任の大切さ<br/>責任感をもつ、役割や雑用をこなすこと、体力の必要性、掃除の大切さ</p> |
|---|--|

こと、実習においては自己決定範囲内でできたこと、などにより特に危機感など感じられなかった結果ではないかと思われる。これらは、保育現場での体験を通してのみ気づき、学びとるものであることから、現場での徹底教育にゆだねること、学校（養成校）での危機管理・健康安全指導など、教科での徹底教育が必要であると考えられる。

(10)「保護者との関わり」について、この内容の割合は保育園・幼稚園、両方とも1～2%と低かった。実習生なので保護者との関わりが少なく、コミュニケーションがあまりとれなかったための回答であった。しかし、保護者との関わりは保育士としての最も大切な要素の一つであることから、実習以外の場を設けて教育すること、経験を積むことの必要性を示唆している。

(11)「教育的なことを学ぶ」と(12)「先生の仕事」この内容については、幼稚園実習における回答だけであった。「教育的なことを学ぶ」は3.9%であり、上位ランクではなかったが、その内容としては、①幼稚園教育のあり方、②人格の基礎を築く基盤であること、③環境を作ることの大切さ、などであった。次に、「先生の仕事」の割合は9.7%で、第4位にランクされた。その内容をみると、①一人担任の大変さ・その責任の重さ、②クラス運営と役割の多さ、③雑用の煩雑さ、④体力が必要、などと述べている。幼稚園の先生の仕事の多忙さは、教材の準備、こどもの日常の観察記録、園の組織校務分掌、園の管理運営、運動会や文化行事の準備など多面的な事をこなしていたこと、などが印象に残っていたと思われる。こどもと共に遊んで教育・保育するだけが先生の仕事ではなく、様々な仕事があるのだと実習で感じ取ったと思われる。これら保育者としての仕事および“教育的なことの学び”のすべて

は、保育士像の形成のもとになったようである。

質問項目2.「保育実習に役立った教科目は何ですか」の間に示したの集計を表4に示した。

この表から、第一位には「音楽（ピアノ・うた）」が26.6%と多く、現場では音を介しての保育内容が展開され、役だったとしている。第二位は「保育教材研究」が15.2%であった。この授業の内容は、絵本・様々なあそび・紙芝居・手あそび・パネルシアターなどであり、すぐに実践指導に役立つ指導・援助法を基にした教科であったことからではないかと思われる。第三に「保育内容・言葉」が14.9%であった。この科目は、言葉の発達、コミュニケーションの手段、さらに言葉あそび、紙芝居、絵本読み、パネルシアターなどの実際を含んでいたことによる結果であると思われる。第四位の「人間関係」は9.9%であった。これは人との関わり、関わりを育てる保育活動、心身に障害を持つ子どもへの援助など実践力を備えた保育者になることを目的にしていることによる結果であると思われる。第五位に「小児保健実習」の6.5%、第六位に「幼児体育」6.3%と、ほぼ同じ割合になっている。小児保健実習ではミルクの飲ませ方、オムツ換え、沐浴などの実践指導の内容で、幼児体育も、こどもの運動あそび、表現あそび（リズム体操・リズムダンス・リトミックなど）であり、ともに保育園・幼稚園ですぐに役立つ内容の授業であったことによる回答ではないかと思われる。第七位に「図工」5.6%と「造形表現（鉛筆、色えんぴつ、クレヨン、水彩、色がみ、ねんどなど、立体表現）」で、第八位に「環境」4.6%となっている。割合は少ないが「乳児保育」「保育内容総論」「日案・指導案・手紙の書き方」、など保育実習で必要不可欠要素であることの記述があった。

以上、実習に役立った教科は幼稚園教育要領・保育所保育指針に基づく5領域を中心にした教科目であった。音楽・体育・図工・教材研究など、また小児保健実習、乳児保育など実習・実技・指導・援助法を伴う授業科目が直接役立ったと思われる。

質問項目3.「将来どのような保育士になりたいと思いますか」の結果を表5に示した。

前途の質問項目1と質問項目2からの気づき・学び・役立った教科と保育実習における保育科学生としての学修成果を総合して見た場合の保育士像をまとめたのが表5である。

これらをまとめてみると、①活発で明るく元気で朗らかな先生（28.3%）、②こどもからも保護者からも、同僚からも信頼される先生（20.8%）、③一人ひとりの

表4 実習に役立った教科目

|    |                      |       |
|----|----------------------|-------|
| 1  | 音楽(ピアノ・うた)           | 26.6% |
| 2  | 教材研究(絵本・紙芝居・パネルシアター) | 15.2  |
| 3  | 言葉(絵本よみ)             | 14.9  |
| 4  | 人間関係                 | 9.9   |
| 5  | 小児保健実習               | 6.5   |
| 6  | 幼児体育                 | 6.3   |
| 7  | 図工                   | 5.6   |
| 8  | 環境                   | 4.6   |
| 9  | 発達心理・臨床心理            | 3.9   |
| 10 | 乳児保育                 | 2.9   |
| 11 | 手紙・日案・記録・指導案         | 1.7   |
| 12 | 保育内容総論               | 1.4   |
| 13 | その他(ゼミ)              | 0.5   |



表5 保育士像

|   |                        |       |
|---|------------------------|-------|
| 1 | 活発・明るく元気・朗らか           | 28.3% |
| 2 | こどもに好かれ、保護者から信頼        | 20.8  |
| 3 | 一人一人の気持ちや立場を大切に        | 19.9  |
| 4 | 穏やかで優しく接し、安心感を与えられる    | 17.4  |
| 5 | こどもと共に、喜びを感じるクラス・環境づくり | 8.7   |
| 6 | 指導・援助が適切               | 4.0   |
| 7 | 地域との関わりも大切に            | 0.9   |

気持ちや立場を大切に、こどもと共に成長できる先生 (19.9%)、④穏やかで優しく接し、感情豊かな、こころに柔軟性のある、安心感を与え、気がつく先生 (17.4%)、⑤こどもと共感でき、クラスが明るく、喜びを感じ一日楽しかったと思われる雰囲気・環境作りのできる先生 (8.7%)、⑥自立を助け、指導・援助が適切にできる先生 (4.0%)、⑦地域との関わりができる先生 (0.9%)、などであった。

以上の内容から学生たちは指導・援助などの方法論も大切だが、それ以前にこどものこころの中に入り、安心感と信頼感を与えられる人間的な面での幅広い、寛大な、許容量のある先生になりたいと考えている。他人のこどもを預かることそのものの責任感と使命感などを兼ね備え、こどもと共に育っていくことを目指すことを感じ取ったようである。これこそ実習による教育成果であると考えられる。

質問項目4.「生涯、保育士を続けたいですか」の問いに関しての結果であるが、将来像として、①続けたい (57.7%)、②続けたいが一時中断し、こどもを育てた後に復帰 (12.0%)、③続けない (10.4%)、④わからない (14.8%)、⑤無回答 (5.1%)、であった。なんらかの形で続ける割合が69.7%とほぼ7割が職業としての価値観を見出していると思われる。

質問項目5.「将来あなたのこどもを幼稚園と保育園どちらに行かせたいかと思えますか」では、保育園に行かせたい (40.7%)、幼稚園に行かせたい (42.9%) とほぼ同率であった。その内容をみると保育園に行かせたいと考えている学生は、第一に、自由でのびのびとしている、自分が仕事を続けたい、第二に他のこどものお世話をしたり、様々な友達と関わる時間を長く持たせ、強いこどもに育てたい、などであった。一方、幼稚園に行かせたいとしている学生は、第一に、こどもの関わる時間を多く持ちたい、さみしい思いをさせたくない、3歳までは自分で育てたい、第二に、自分が幼稚園出身だった、という内容であった。この結果により、保育園・幼稚園のそれぞれの特徴と良さ、実習での「学び・気づき」により感じ得たこと、また

自分の幼児期経験してきた道を考え合せた結果ではないかと推察できる。

#### IV. ま と め

学生たちは保育実習で、何を“学び”どのような“気づき”があったか、また、その結果、保育実習によって形成される保育士像を明らかにすることが本研究の目的であった。

そこで、自作の「保育科学生の学修に関する調査」(15項目)の中から、1.「実習から学んだこと」、2.「実習に役立った授業科目」の項目、さらに、3.「将来どのような保育士になりたいか」、4.「生涯、保育士を続けたいか」、5.「将来、あなたのこどもを幼稚園と保育園どちらに行かせたいか、それは何故か」の5項目についての回答を集計し、それを基に考察した。

その結果、多くの学生は、①こどもに対しての接し方、関わり方、②対応・対処の仕方、③保育方法 (一人ひとりを尊重し、こどもの素養を引き出す指導・援助法など)、④言葉かけ・声かけ、などがこどもの意欲に結びつき積極性につながることを“気づき・学び”があり、また年齢による発達の違い、こどもの食事・安全・衛生面における配慮・援助の大切さ、保育士の仕事全般を通して教育的なことを学びとり、自分自身 (保育者自身) に対しての気づきにより、保育士としての構え、関わり方の大切さを知り、常に勉強が必要であること、責任のあるやりがいのある職業であると感じとり、保育士としての自覚が生まれた。これらの“気づき”と“学び”は学生の保育士像形成への基となり、その結果として、“元気で明るく活発な保育士”、“こどもからも保護者からも信頼される保育士”、“一人ひとりの気持ちや立場を大切に穏やかで安心感を与えられる保育士”、“こどもと共感し、喜びを感じてもらえるクラス・環境作りが出来る保育士”など、人間的な面での幅広い、寛大な許容量のある保育士になりたいと考えている。

以上、保育園・幼稚園における実習を通して様々なこどもや保育士の先生との出会いにより、学生たちは自分自身に対する気づき・学びから、理想とする保育士像が浮かび上がり、保育士としての使命感がより鮮明になったことが窺えた。こどもと共に育っていくことを感じ取っていることも、実習による教育効果であったと考えられる。

(本研究内容の一部は、第46回(2007年9月)全国保育士養成協議会研究大会で発表した)

### 引用・参考文献

- (1) 加藤ヤツヨ・松原敬子「保育者養成における自己の「実習課題の取り組み」」日本保育学会第60回大会発表論文集P600～601 2007年
- (2) 木村和子・牧信子「保育実習での学びを幼稚園実習に」日本保育学会第60回大会発表論文集P602～603 2007年
- (3) 厚生労働省「保育行政の今日的課題」厚労省児童家庭局保育課 平成19年5月
- (4) 野尻美枝・森眞理「保育者(幼稚園教諭・保育所保育士)の成長につながる学びの様相—職務内外に広がる成長について質問紙調査より考える—」日本保育学会第60回大会発表論文集P568～569 2007年
- (5) 太田節子「保育者養成課程における学習課題—保育者の意識調査を中心として—」日本乳幼児教育学会第16回大会研究発表論文集P52～53 2006年
- (6) 白川蓉子・稲垣由子ほか「育ちあう教育保育」有斐閣コンパクト2004年
- (7) 田中哲郎「保育園における事故防止と危機管理マニュアル」日本小児医事出版2006年
- (8) 山口鉄久「教育・保育実習による実習生・幼児・保育者の学び—幼稚園教育実習日誌から—」日本保育学会第60回大会発表論文集P358～359 2007年
- (9) 幼稚園教育要領・保育所保育指針第3版 チャイルド本社 2006年5月
- (10) 全国保育士養成協議会「保育士養成システムのパラダイム転換Ⅱ—養成課程のシークエンスの検討—」保育士養成資料集 第46号2007年5月
- (11) 全国保育士養成協議会「保育士養成」(会報No.56) 平成19年8月
- (12) 全国保育士養成セミナー第46回研究大会「子どもの未来を拓くこれからの保育士養成—地域における保育士養成の役割—」全国保育士養成協議会 平成19年9月

(平成19年11月28日受理)